

みじかい木ぺん

宮沢賢治

青空文庫

一

キツコの村の学校にはたまりがありませんでしたから雨がふるとみんなは教室で遊びました。ですから教室はあの水車小屋ごやみたいな古臭いふるくさ寒天かんてんのような教室でした。みんなは胆取りきもとと巡査じゆんさにわかれてあばれています。

「遁にげだ、遁にげだ、押おさえろ押おさえろ。」「わあい、指ゆび噛かじるこなしだであ。」
がやがやがたがた。

ところがキツコは席せきも一番前のはじで胆取りにしてはあんまり小さく巡査にも弱かったですのですからその中にはいませんでした。机つくえに座すわって下を向むいて唇くちびるを噛かんでにかにか笑わらいながらしきりに何か書いているようでした。

キツコの手は霜しもやけで赤くふくれていました。五月になつてもまだなおらなかったのです。右手のほうのせなかにはあんまり泣ないて潰つぶれてしまった馬の目玉のような赤い円いかたがついていました。

キツコは一寸すんばかりの鉛筆えんぴつを一いっし生しょうけん命めいにぎつてひとりでにかにかわらいながら8

の字を横よこにたくさん書いていたのです。（めがね、めがね、めがねの横めがね、めがねパ
ン、くさりのめがね、）ところがみんなはずいぶんひどくはねあるきました。キツコの机つくえ
はたびたび誰だれかにぶつつかられて暗礁あんしょうに乗りあげた船のようにがたつとゆれました。
そのたびにキツコの8の字は変へんな洋傘ようがさの柄えのように変かわつたりしました。それでもやつぱ
りキツコはにかにか笑わらって書いていました。

「キツコ、汝うなの木ペン見せろ。」にわかに巡査じゆんさの慶助けいすけが来てキツコの鉛筆えんぴつをとつて
しまいました。「見なくてもいい、よごせ。」キツコは立ちあがりましたけれども慶助はせ
いの高いやつでそれに牛若丸うしわかまるのようにうしろの机の上にはねあがってしまいましたから
キツコは手がとどきませんでした。「ほ、この木ペン、この木ペン。」慶助はいかにもお
かしそうに顔をまっかにして笑って自分の眼めの前でうごかしていました。「よごせ慶助わ
あい。」キツコは一生けん命のびあがつて慶助の手をおろそうとしましたが慶助はそれを
はなして一つうしろの机つくえににげてしまいました。そして「いがキツコこの木ペン耳みみさ入
じやい。」と云いいながらほんとうにキツコの鉛筆を耳に入れてしまったようでした。キツ
コは泣いて追おいかけましたけれども慶助はもうひらつと廊下ろうかへ出てそれからどこかへかく
れてしまいました。キツコはすっかり氣持きもちをわるくしてだまって窓まどへ行いって顔を出して雨



だれを見ていました。そのうち授業じゅぎょうのかねがなつて慶助は教室に帰つて来遠くからキツコをちらつとみましたが、またどこかであばれて来たとみえて鉛筆のことなどは忘れてしまつたという風に顔をまつかにしてふうふう息いきをついていました。

「わあい、慶助、木ペン返せじや。」キツコは叫さけびました。「知らないじや、うなの机なさ投なげてたじや。」慶助は云いました。キツコはかがんで机のまわりをさがしましたがありませんでした。そのうちに先生が入つて来ました。

「三郎さぶろう、この時間うな木ペン使つかつてがら、おれさ貸かせな。」キツコがとなりの三郎に云いました。

「うん、」三郎が机の蓋ふたをあけて本や練習帖れんしゅうちようを出しながら上のそらで答えました。

二

課業かぎようがすんでキツコがうちへ帰るときは雨はすっかり晴れていました。

あちこちの木がみなきれいに光り山は群青ぐんじようでまぶしい泣き笑いなわらいのように見えたのでした。けれどもキツコは大へんに心もちがふさいでいました。慶助けいすけはあんまりいばつてい

るしひどい。それに鉛筆も授業がすんでからいくらさがしてももう見えなかったのです。どの机の足もとにもあのみじかい鼠いろのゴムのついた鉛筆はころがっていませんでした。新学期からずうつと使っていた鉛筆です。おじいさんと一緒に町へ行つて習字手本や読方の本と一緒に買って来た鉛筆でした。いくらみじかくなつたつてまだまだ使えたのです。使えないからつてそれでも面白い鉛筆なのです。

キツコは樺の林の間に行きました。樺はみな小さな青い葉を出しすきとおった雨の雫が垂れいい匂がそこらいつぱいでした。おひさまがその葉をすかして古めかしい金いろにしたのです。

それを見ているうちに、

(木ペン樺の木に沢山あるじや)キツコはふつとこう思いました。けれども樺の木の小さな枝には鉛筆ぐらいの太さのはいくらでもありますけれども決して黒い心がはいってはいないので。キツコはまた泣きなくなりました。

そのときキツコは向うから灰いろのひだのたくさんあるぼろぼろの着物を着た一人のおじいさんが大へん考え込んでこっちへ来るのを見ました。(あのおじいさんはきつと鼠捕りだな。)キツコは考えました。おじいさんは変な黒い沓をはいていました。そしてキツ

コと行きちがうときいきなり顔をあげてキッコを見てわらいました。「今日学校で泣いたな。目のまわりが狸たぬきのようになってるぞ。」すると頭の上で鳥がピーとなきました。キッコは顔を赤くして立ちどまりました。

「何を泣いたんだ。正直に話してごらん。聞いてあげるから。」

鳥がまた頭の上でピーとなきました。するとおじいさんは顔をしかめて上を向いて「おまえじゃないよ、やかましい、だまっておいで」とどまりました。

すると鳥はにわかにしいんとなつてそれから飛とんで行つたらしくぼろんという羽の音も聞え樺かばの木からは雫しずくがきらきら光つて降りました。「いつてごらん。なぜ泣いたの。」

おじいさんはやさしく云いいました。「木ペン失なぐした。」キッコは両手りょうてを目にあててまたしくしく泣きました。「木ペン、なくした。そうか。そいつはかあいそうだ。まあ泣くな、見ろ手がまつ赤かじやないか。」

おじいさんはごそごその着物きもののたもとを裏返うらがえしにしてぼろぼろの手帳てちょうを出してそれにはさんだみじかい鉛筆えんぴつを出してキッコの手に持もたせました。キッコはまだ涙なみだをぼろぼろこぼしながら見ましたらその鉛筆は灰色はいいろでごそごそしておまけに心の色も黒でなくなかにも変へんな鉛筆えんぴつでした。キッコはそこでやつぱりしくしく泣いていました。「ははああ

んまり面白くもないのかな。まあ仕方ない、わしは外に持つていないからな。」おじいさんはすつと行つてしまいました。

風が来て樺の木はチラチラ光りました。ふりかえつて見ましたらおじいさんはもう林の向うにまがつてしまったのか見えませんでした。キツコはその枝きれみたいな変な鉛筆を持つてだまつてかくしに入れてうちの方へ歩き出しました。

三

次の日学校の一時間目は算術でした。キツコはふとああ木ペンを持つていないなと思いました。それからそうだ昨日の変な木ペンがある。あれを使おう一時間ぐらいならもつだろうからと考えつきました。

そこでキツコはその鉛筆を出して先生の黒板に書いた問題をぐそぐその藁紙の運算帳に書き取りました。

48×62＝「みなさん一けた目のからさきにかけて。」と先生が云いました。「一けた目からだ。」とキツコが思ったときでした。不思議なことは鉛筆がまるでひとりでうごいて

96と書いてしまいました。キツコは自分の手首だか何だかもわからないような気がして呆れてしばらくぼんやり見ていました。「一けた目がすんだらこんどは二けた目を勘定して。」と先生が云いました。するとまた鉛筆がうごき出してするすると288と二けた目までのところ書いてしまいました。キツコはもうあんまりびっくりして顔を赤くして堅くなつてだまつていましたら先生がまた「さあできたら寄せ算をして下さい。」と云いました。またはじまるなと思つていましたらやつぱり、もうただ一いきに一本の線もひつぱつて2976と書いてしまいました。

さあもうキツコのよろこんだことそれからびっくりしたこと、何と云つていいかわからないでただもうお湯へ入つたときのようにじつとしていましたら先生がむちを持つて立つて「では吉三郎さんと慶助さんと出て黒板へ書いて下さい。」と云いました。「キツコは筆記帳をもつてはねあがりました。」そして教壇へ行つてテーブルの上の白墨をとつていまの運算を書きつけたのです。そのとき慶助は顔をまっ赤にして半分立つたまま自分の席でもじもじしていました。キツコは9の字などはどうも少しなまずのひげのようになつてうまくないと思ひながらおりて来たときようやく慶助が立つて行きましてたけれども問題を書いたただけであとはもうもじもじしていました。

先生はしばらくたつて「よし」と云いましたので慶助は戻つて来ました。先生はむちでキツコの説明せつめいしました。

「よろしい、大へんよくできました。」キツコはもうにがにがにがわらつて戻つて来ました。（もう算術さんじゆつだつていっこうひどくない。字だつて上手じようずに書ける。算術帳とだつて国語帳とだつて雑作ぞうさくなく書ける）

キツコは思いながらそつと帳面ちようめんをみんな出しました。そして算術帳国語帳理科帳とみんな書きつけました。すると鉛筆えんぴつはまだキツコが手もうごかさないうちにじつに早くじつに立派りっぱにそれを書いてしまふのでした。キツコはもう大悦おおよろこびでそれをにがにがならべて見ていましたがふと算術帳と理科帳と取りちがえて書いたのに気がつきました。この木ペンにはゴムもついていたと思ひながら尻しりの方のゴムで消そうとしましたらもう今度は鉛筆がまるで踊るおどるように二、三べん動いて間もなく表紙ひょうしはあとも残さずきれいになつてしまいました。さあ、キツコのように二、三べん動いて間もなく表紙ひょうしはあとも残さずきれいになつてしまいました。勉べんきよ

強うも何もいらない。ひとりでどんどんできるんだ。僕はまず家へ帰つたらおつ母かさんの前へ行つて百けたぐらいの六むつかしい勘定かんじようを一ぺんにやつて見せるんだ、それからきつと図画だつてうまくできるにちがいない。僕はまず立派りっぱな軍艦ぐんかんの絵を書くそれから水車

のけしきも書く。けれども早く耗^へつてしまうと困^{こま}るなあ、こう考えたときでした鉛筆^{にわ}が俄^にかに倍^{ばい}ばかりの長さに延^のびてしまいました。キツコはまるで有^{うち}頂^{よう}天^{てん}になって誰^{だれ}がどこで何をしているか先生がいま何を云^いつているかもまるつきりわからないという風でした。

その日キツコが学校から帰つてからののはしやぎようと云つたら第^{だい}一^{いち}におつかさんの前で十けたばかりの掛^{かけ}算^{さん}と割^{わり}算^{さん}をすらすらやつて見せてよろこばせそれから弟をひっぱり出して猫^{ねこ}の顔を写^{しゃ}生^{せい}したり荒木又右工門^{あらかまたえもん}の仇^{あだ}討^{うち}のどこを描^かいて見せたりそしておしまひもうお話を自分でどんどんこさえながらずんずんそれを絵にして書いていきました。その絵がまるでほんもののようにでしたからキツコの弟のよろこびようと云つたらありませんでした。

「さあいいが、その山^{やま}猫^{ねこ}はこの栗^{くり}の木がらひらつとこつちき遁^にげだ。鉄砲^{てつぽう}打^{うち}ぢはこうぼかげだ。山猫はとうとうつかまつて退^{たい}治^じされた。耳の中にこう云う玉入^{たまいり}つていた。」なんてやつていました。

そのうちキツコは算術も作文もいちばん図画もうまいので先生は何べんもキツコさんはほんとうにこのごろ勉強のために出来るようになったと云^いつたのでした。二学^が期^{つき}には級^{きゅう}長^{うち}にさえなつたのでした。その代^{かわ}りもうキツコの威^い張^ばりようと云つたらありませんでし

た。学校へ出るときはもう村中の子供らをみんな待たせて置くのでしたし学校から帰って山へ行くにもきつとみんなをつれて行くのでうちの都合や何かで行けなかった子は次の日みんなに撲らせました。ある朝キツコが学校へ行こうと思つてうちを出したらふとあの鉛筆がなくなっているのに気がつきました。さあキツコのあわて方つたらありません。それでも仕方なしに学校へ行きました。みんなはキツコの顔いろが悪いのを大へん心配しました。

算術の時間でした。「一ダース二十銭の鉛筆を二ダース半ではいくらですか。」先生が云いました。みんなちよつと運算してそれからだんだんさつと手をあげました。とうとうみんなあげました。キツコも仕方なくあげました。「キツコさん。」先生が云いました。

キツコは勢よく立ちましたがあともう云えなくなつて顔を赤くしてただもう「以下原稿なし」

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

2011年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みじかい木ぺん

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>